炬火を掲げていざ謳う　No.47

我らの泉鳥取

2023年6月21日（水）
編集　泉鳥取高等学校閉校記念事業実行委員会
大阪府阪南市緑ヶ丘1-1-10
https://www.osaka-c.ed.jp/custom91.html

見守り続けて47年

薬剤師　津田　麗子　先生

― 開校から閉校まで ―

今回は泉鳥取高校開校から、ずっと見守り続けていただいている方をご紹介しましょう。学校薬剤師で津田薬局の津田麗子先生です。皆さんが飲む飲料水の検査や教室の明るさの検査（照度検査）、プールの水質の検査、教室の空気のチェック、布団やソファのダニ検査など、目立たないけれど大切なところで皆さんの健康を見守っていただいています。ご本人にインタビューさせていただきました。

津田先生は、本校開校以来ずっと学校薬剤師として、本校の環境改善にご協力をいただいています。

津田：あっという間ですね。開校と同時に学校薬剤師になりましたけど、前の学校医である田中公一郎先生と私は、学校の近くだから、ということで学校医と薬剤師になりました。私はほんとうにたまたま近所だったので、薬剤師会に言われてたまたま学校薬剤師になりましたけど、ここまでやるとは思いせんでした。

開校の頃の思い出をお願いします。

津田：まだ学校が出来たてで、きれいな高台に学校ができたんですけど、まだ運動場は石ころだらけで、子どもたちは運動場の石を拾っていました。当時は私も若くて何もわからない頃でしたから、養護教諭の北橋（久子）先生に学校保健についてずいぶん教えていただきました。

薬剤師としてのご苦労はどうでしたか？

津田：最初に困ったのが、水道です。当時は阪南町の水道水と大阪府水道局の水を混ぜて使っていました。当時の阪南町の水は、海水が混じっていて、塩分濃度が高かったんです。だから茶瓶でお湯を沸かすと石灰分や塩分が付着して、白い塊になります。飲み水として適切な水にするためにはどうすればいいか、大阪府の水道局とも交渉をしたりして、府水道の比率を上げたりしました。また、開校当時は、多数のクラス数（36学級）を想定して施設が作られています。受水槽も高架水槽も大きいものの、生徒は1年生が450人ほどしかいないので、水道蛇口から出る水の残留塩素濃度が足りず、飲料にはふさわしくない状況が続きました。これは、養護教諭の先生と協力して大阪府に掛け合い、受水槽や高架水槽に仕切りをつけて、貯水量を減らし、残留塩素濃度を確保しました。このことは全国の学校環境衛生発表大会で発表させていただきました。

それ以外には、この学校は環境が良くて、ほとんど苦労したことはありませんね。ただ、一時教室の照度にコントラストが強く、カーテンの改良についてはお話ししました。

泉鳥取高校が機能統合でりんくう翔南高校統合されることについて、どう思われますか？

津田：この学校にお世話になって、長年いろいろと取り組んできました。そのおかげで叙勲（瑞宝双光章）までしていただきました。実は高齢ともなったので、そろそろ薬剤師を引退しようかと思っていたのですが、あと２年、最後まで泉鳥取高校を見守ろうと思っています。

本日はありがとうございました。

瑞光双光章叙勲時のご夫妻

https://www.osaka-c.ed.jp/custom91.html　からpdf版をダウンロードできます。